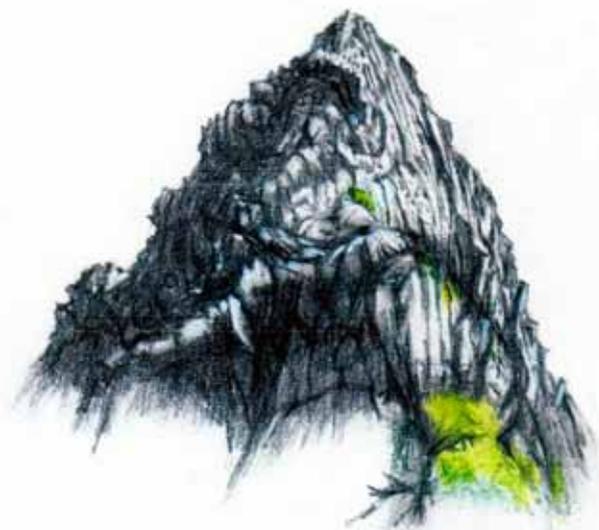


あそび 7

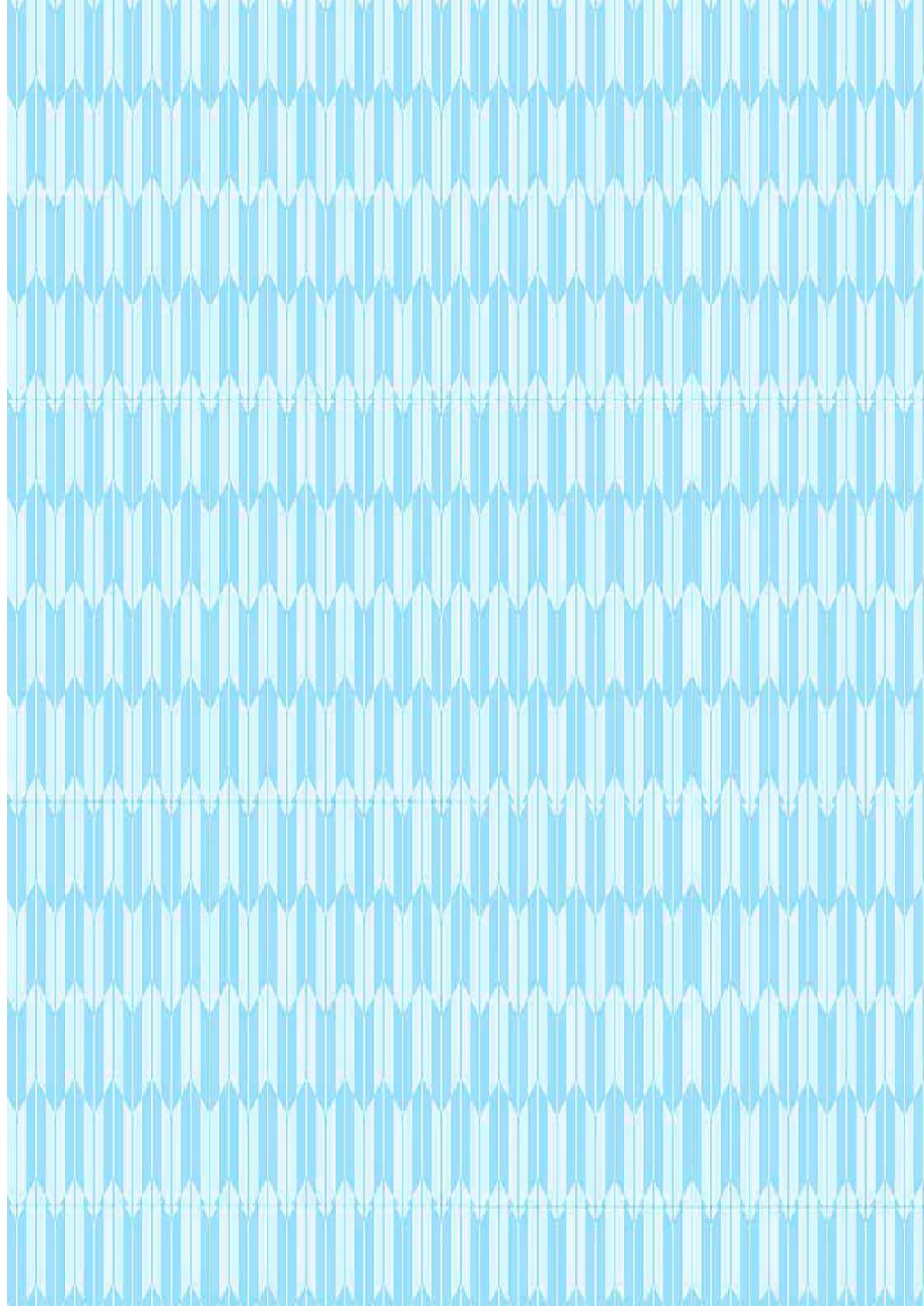
2021



山巡り 須賀忠男



宝剣岳 2931m
長野県の南側にある中央アルプスの山
千畳敷カールから見ると絶壁だ！
北側から回り込めど
楽しいスリルある岩場の
頂上に立つ事が出来る。



あを

七月集

ずらす

佐藤 竹僊

片化粧などとたはむれマスクかな

ゆきじよろの肩につかまり梅の花

花札のかはづ欠けたり全て捨つ

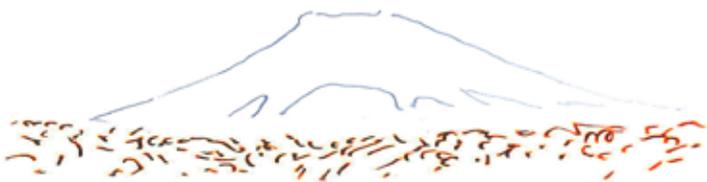
ありあけのほとびきつたる春の月

戦争は勝者がレフリーー古簾

命日のころに咲く鉢日へずらす

夕焼が大きな音をしてをりぬ

日本晴キリンが穴の中に立つ



桐の花

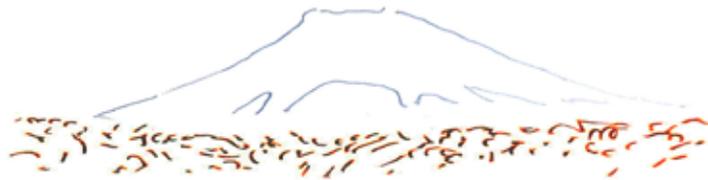
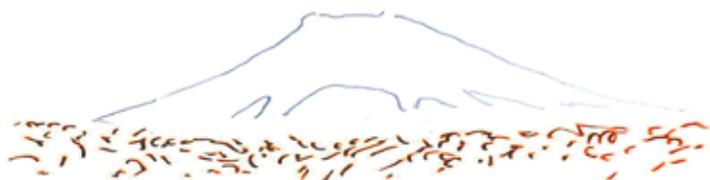
森 なほ子

山国に母の生涯桐の花
日々気温たしかめ老の五月過ぐ
抜いて挿す杉菜の遊びその昔
葉桜の校庭見たく遠まはり
おととしの火事の空地に春じをん
河岸段丘最上段の夏霞
青空の曇る早さや合歓の花
窓の雨ビル三階に夏料理

みちのく

赤座 典子

薫風の釜石球場「逃げて」の碑
人見えぬ広場に泳ぐ鯉幟
日の盛浜を隔つる防潮堤
高台の復興住宅西日しむ
家・道・トンネル皆新しき夕薄暑
雲雀の苑海桐の花の匂ひ立つ
桐の花山紫に覆ひけり
ト口箱の線路に弾む青嵐



氷菓子

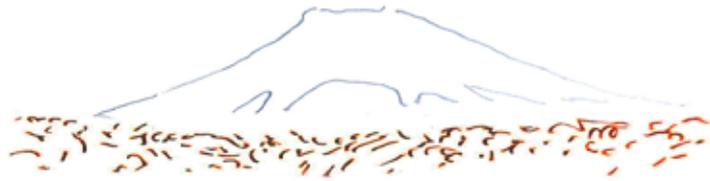
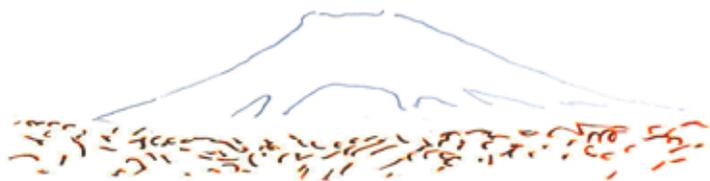
秋川泉

ひと晩で虫に喰はれし庭の芹
芍薬や主なき庭静まりて
川風の闇夜を泳ぐ鮭のぼり
薫風や神父運転隣り僧
ゴッホに似る教師の話麦畑
音もなき真空の昼氷菓子
溶けるよと句会に届く氷菓子
ゆっくりと罌粟の日傘の遠ざかる

夏を待つ

大日向幸江

木もれ陽を編み込むやうにレース針
断捨離をしての寂しさ夏を待つ
大リーグ大谷選手鮫となり
夏めくも人声の無いアンコール
不細工ですが甘い甘い枇杷包む
向日葵のやうな笑顔と誉められし



おいしいお茶

七郎衛門吉保

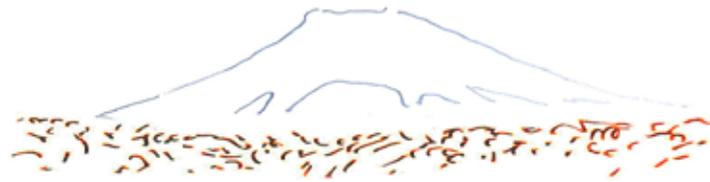
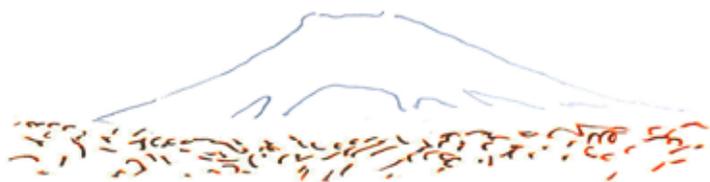
東北路人整はぬ五月かな
浪江町気配未だの五月風
菖蒲湯も忘れがちなりコロナの禍
一世紀前の警笛晶子の忌
大地より辰砂吸ひ上ぐ花柘榴
紫陽花や相合傘の藍と紅
電線に揃ひ親待つ燕五羽
入選句ラベルとなりし「おいしいお茶」

オレンジジャム

篠田純子

浪江町の「プレイボール」や冷やし酒
オレンジジャム炭酸に割りアイスクリーム
廃校は公園になり青しぐれ
銀座の草引きて何かの幼虫出づ
死にさうな叫び子鴉巢より落ち

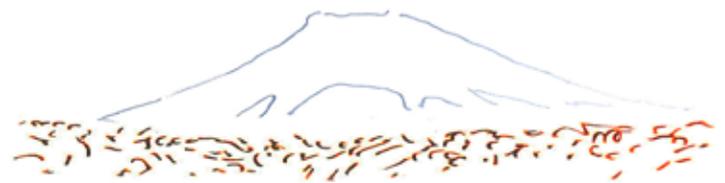
spotify spotify アイ ジャズ難問数独解け涼し



ジュブナイル

篠田大佳

桜まじ岡田かめやの非売品
月おぼる橋のあかりの煌々と
夏はじめナイルのカレーは道へ香る
トラックの荷台の夏が揺れてゐる
サイダーの甘き濁りやジュブナイル
ダンサーの笑顔に夏の昏さかな



五月尽

須賀敏子

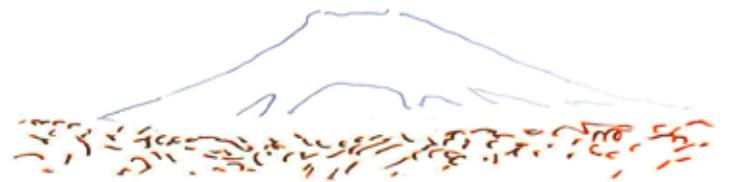
万緑や大谷選手のホームラン
コロナ禍や銀座は遠し額の花
手を洗ひ口を漱いで新茶汲む
自転車に二人乗りした麦の秋
今年竹翔馬中学二年生
夫の研ぐ包丁軽し夏に入る
母の日や届くソックス五本指
三度目の緊急事態五月尽



定家葛

田中藤穂

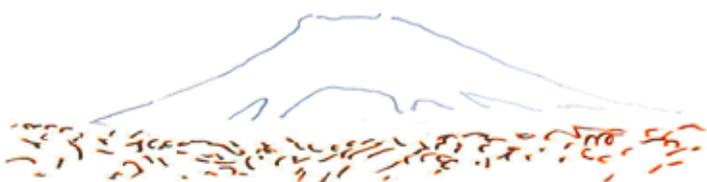
新緑を揺らすそよ風コロナ増ゆ
闇匂ふ定家葛の咲く石塀
定家葛一枝乞はれ由来まで
定家葛叶はざる恋昔にも
風立ちぬ青蔦揺るる石の塀



五月闇

長崎桂子

脇道や目と目の会釈鉄線花
鉄骨の玄関映える鉄線花
庭石を覆ひ鮮やか草むしり
うすみどり卵とぢする莢豌豆
晴渡り寛ぐ時や紅いちご
子供連れ弁当下げる五月闇
押し車時たま止めて五月闇
五月闇お裾分けにと手続きす



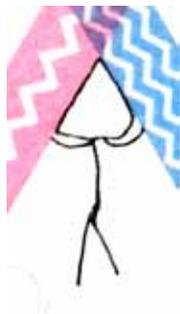
採集集

走り茶や窓は両手で開くるもの 佐藤 喜孝
 田植機は大童農夫は嬉々と 長崎 桂子
 ふるさとの春の祭の日と思ふ 森 なほ子
 診断は無罪放免藤の昼 赤座 典子
 筍の歯ごたえやさし水の里 秋川 泉
 桜散る足元を見る金次郎 大日向幸江
 京漬物赤黄緑の夜半の春 七郎衛門吉保
 恭子さんのふれし八重桜に触るる 篠田 純子
 酎ハイが積まれし歩道春あけぼの 篠田 大佳
 草の餅買うて川沿ひ帰りけり 須賀 敏子
 柿の葉鮎待つ縁台や春の川 田中 藤穂



青き踏む喘ぐ眼下に濃尾平野 長崎 桂子
 ふるさとの春の祭も過ぎにけり 森 なほ子
 ふるさとは遠しと来り春の川 々
 「ひさしぶりー」駆込んでくる木の芽風 赤座 典子
 イースター神父と僧侶手をとりにて 秋川 泉
 竜宮に水の痕跡種を蒔く 大日向幸江
 文机のオバマの著作目借時 七郎衛門吉保
 Wi-Fiはかなしき波動水温む 篠田 大佳
 桜草咲いて貴女は十七才 須賀 敏子
 児童公園残花の下の滑り台 田中 藤穂

喜孝抄



何處までもまったただなかよ海の上

佐藤喜孝

船旅でしょうか。海は漂泊のみを許すものの、人間を拒んでいるようです。旅はどのような旅であつても、孤独で切実な気持ちを抱えて出かけるものだと思います。豪華客船であつても、船の外を見れば自分たちは孤独なのです。掲句と句意は違いますが、誓子の「海に出て木枯帰るところなし」を思いました。(大佳)

ミャンマーの木を蓋ひ咲く紺朝顔

佐藤喜孝

ミャンマーの朝顔は夜明け前から咲いて、勢いもあるようです。一樹を覆い尽くして、咲く紺色の朝顔を見てみたいです。軍と、市民の争いに巻き込まれずに、強く咲いてほしいものです。

5月2日に鍛冶橋通りの京橋辺りで、ミャンマーのデモ隊に遭遇しました。デモ参加者は全員黒服で、シュプレヒコールに両手を突き出し、祖国を憂い整然と行進する姿に胸が熱くなりました。(純子)

花杏咲きみちしま未だ散らず

田中藤穂

杏の花の鮮やかさに感動しているけれども、杏の花は長い間開花しているようです。いつまでも

咲いていないで、そろそろ実をつける努力をしたらどうだろうか、変化を促している作者。変化を恐れず、どんどん切り拓こうという力強さと読みました。(大佳)

旗を振り土手ゆく園児花三分

長崎桂子

旗がどのような旗か、想像が巡ります。遠足の旗ならば、引率の先生が振つていそうです。駅伝やパレードの声援のためのものかもしれないし、お子様ランチの旗を持っているかもしれない。花時に土手に行くのは、やはり遠足だろうと思います。「花三分」にあたたかくなりつつある土手の光景を感じ取れます。(大佳)

工事場に痛と声あり夕永し

森なほ子

工事現場は秘匿された男の世界という感じがします。工事現場の声はあまり聞こえません。近くに行くときよく若手が怒鳴られている声は聞こえます。しかし、それでも工事現場の中は秘密の空間なのです。想像を膨らませると、声がよく響くのは釘打ちのときでしょうか。頭が働かなくなつて、うっかり指を打つてしまった。そろそろ夜かなと空を見ると、外はまだ明るい。春を感じます。(大佳)

極楽橋を一方通行花の雲

赤座典子

「極楽橋」は高野山へ行く道にある橋と橋の名前を冠した鉄道の駅で、極楽橋は「聖域と俗界の境界」という言い伝えがあり、それが観光資源になっているようです。ほかに、墓場へ通じる道

に架かる橋を極楽橋というようです。極楽橋はこの世とあの世の境界で、「花の雲」から察するに、死に誘われている様子です。「一方通行」には俳諧味があります。生死の境界が相互通行になった暁には、交通整理が大変そうです。(大佳)

日脚伸ぶ三毛が茶トラを連れてくる

秋川 泉

調べると、三毛猫はメス猫で、茶トラがオス猫であることがほとんどのようです。娘が彼氏を家に連れ込んだと考えると、この句の楽しさが湧き上がるでしょう。「日脚伸ぶ」に、初対面の緊張が徐々に解ける感じが表現されています。(大佳)

再開の動物園に花の雨

大日向幸江

再開の動物園に雨が降ることは、見物客にとつては残念なことなのですが、なぜか陰鬱な感じがしません。花時に残念なはずの「花の雨」が、見物客にとつても見られる動物たちにも、ほっとした感じを与えてくれるように思います。雨の光景は、決して悪いことばかりではありません。雨だからこそ映える光景を見つけたような気分がします。(大佳)

長閑さや無人ショップの服探し

七郎衛門吉保

テレビを見ていたら、たまたま無人の古着屋さんを取材していました。そのお店はリモートカメラを通して店員さんと会話することもできるようですが、無人ショップは、利用客から働きかけ

なければ応答が成り立たない店のようです。無人ショップは孤独を示唆します。孤独と取り合わせることで、長閑に孤独がよまれていることがわかります。(大佳)

木挽町から月島へ夜のさくら

篠田純子

有楽町から鉄砲洲へ続く通りの一部を銀座桜通りとって、春になると桜で華やかになります。木挽町は銀座東地域の古い町名です。街灯に照らされた夜桜が一段と白く映える様子がうかがえます。「さくら」が月島の「月」が桜と映えあっています。(大佳)

啓蟄や九九唱へつつウオーキング

篠田純子

九九の覚えたての小学生が学校の往復に「ににんがし」とか云ひつつ通った。この句では九九を唱へてゐるのは若者ではないやうだ。私は残念ながら九九は五の段から先はあやふや。脳の活性化によささう、私もやってみるか。(喜孝)

三月十一日ラヂオ一分無音なり

篠田大佳

終戦記念日、広島忌、長崎忌。黙祷を捧げる日はいくつかあっても、戦後生まれの人々にとつては体験上知り得ない日です。しかし十年前の三月十一日の東日本大震災は、地震と津波に二万程の人の命が瞬時に奪われたのを、実際に報道で見聞きました。無音の一分間に、犠牲になられた方々の鎮魂と、遺族に寄り添う作者なのです。(純子)

作者に失礼だが、なんとも捉へどころのない句。なにになんとも私には面白い俳句だ。「菓子折」といふ語彙に従前からのしきたりにしたがった習慣と思へた。(喜孝)

同じ樹を見上げる二人句鳥

須賀敏子

句鳥は鶯の異名です。鶯のことを鑑賞のために調べると、鳥類には珍しく一夫多妻の鳥で、オスは縄張りを確保するだけで子育てに関与しないそうです。この雑学を知って、この樹を見上げる二人が平安王朝の人物として想像されるようになりました。句鳥の言葉からも格調の高さを思わせま

す。強調された「二人」に、同じ目線で違うものを見ていたときの複雑な感情が膨らみます。(大佳)



佐藤喜孝

森なほ子

吹いてみて唇甘し桐の花

合羽着て人の眼をして梅雨の犬

葉桜の下行けばなほ濡れさうな

○植物は種を遺すため花を咲かせ甘い蜜を作り虫を呼ぶ。私もいたずらに花を摘み蜜を吸ってみたことがある。その甘さに驚いたものだ。掲句は私のやうに吸ってはいない。たはむれに桐の花をラッパのやうに吹いてみた。そしておやつと思はれた。花の甘さを期待しての行為ではなかったの、唇がほんのり甘いことにハッとされた。軽い驚きが吹いてみてと上手く表現された。

○防寒具を着た犬や雨具を被た散歩の犬を見かける。乳母車や自転車に乗った犬にも会ふ。なほ子さんも合羽を着た犬に出合はれたのだらう。そんな犬と目があつた。「人の眼をして」に感情豊かな犬の表情が伺へる。私には嬉しさうにしてはぬいな犬の人を見上げる目線が浮かんだ。犬の表情

はなほ子さんの心の表情の反映かもしれぬ。

○瀧先生に

木槨は雨より太し青楓 春一

がある。どちらも初夏の明るい雨を描いてゐる。降り出した雨なら木の下に行けばしばらく雨宿りが出来る。そのうち雨に耐え切れず木槨となり零れてくる。「雨より太し」である。このやうな時、葉桜の下に行つても、といふのがなほ子さんの作品。同じ情景を違ふ目線で描かれた作品。

赤座典子

白一色のあぢさゐ路地に並びゐる

鈴生りの小さき枇杷のレモン色

あの人は卒寿の筈と豆の飯

○狭い路地を抜ける。あぢさゐが通る人を見送るやうにならんで咲いてゐる。それも七変化ともいはれるあぢさゐだが、ここは白一色とのこと。作者にはうれしい路地である。

○あの暖かい色と触感の枇杷の実も幼い頃はレモン色をしてたと発見した。これはこれで新鮮な発見の喜びがある。表現技法といふほどではないが、果実を果実に喩へるよりも、果実を異質なもの

に喩へるほうが驚きがあつて面白い。

○みどりの豆の色と白いご飯、なんとも単純な料理。ところがこれが単純ではない。繊細な気配りがないと失敗する。そんなおいしいごはんを堪能しつつ、豆飯にふさはしい人をおもふ。さう、もう卒寿になる筈だと。優しく滋味ある作品。

秋川 泉

色あせた旗は深夜の氷菓店

水溜り大回りする蟻の列

ひとことも言葉交さず夕薄暑

○白地に青で描かれた波、その上に「氷」と赤い字がはためくお馴染みの欠き氷屋さんの旗。色あせた旗では美味しく無ささう。それも深夜。この時間にお店が開いてゐたのだらうか。それとも仕舞ひ忘れたのか。泉さんは特異な景に感興を覚えた。

○身近な、お馴染みの、知り尽くした、と思はれる小動物もある時おやつと思ふことに出くはす。雨あがりの水溜りでもあらうか。蟻の列がその淵を歩いてゐる。それを「大回り」と見えれば蟻に同情もしたくなる。などとこの句を読んでゐる内に、この句の術中に嵌ってしまった。

○二人はひとところで一緒に夕方まで過ごされた。さうだ、何も会話をせずに過ごしてしまった。よくあることである。西洋の夫婦では考へられぬことであらう。日本の夫婦のそれも年季の入った夫婦の平凡な一日を描いた。

大日向幸江

ペディキュアに似合ふ白靴求めをり
麦色の髪の少女と虹を見る

○私に無縁のオシャレの話だ。とりあへず辞書「ペディキュア」足とその爪の手入れ」とある。爪に彩色すことと知る。赤く塗られた爪と白靴。よくお似合ひだが、なほ一層似合ふ靴を探した。お気に入りが見つかり喜ばれたのだらうが、「求めけり」まで云はなくともちよつと思つた。

○麦色ときいてどんなイメージの色を想像するだらうか。「小麦色」と聞くと後ろに肌と付けて「小麦色の肌」となり日焼けした女性の肌色を想像できる。この句の「麦色」も青麦などは思はず茶系色を想ふ。そのやうな色に染髪された少女と虹を見る、と単純な構成の句。単純だが魅かれる。麦色の髪が効いている。一句の芯になつてゐる。

七郎衛門吉保

パレットに雫のあるや梅雨の入り
五月雨の風流毀す五月の雨
提琴のユーモレスクや梅雨晴れ間

○野外で画架を立て絵を描くのを楽しんでゐる。気が付くとパレットに雫が乗つてゐる。梅雨に入つたのだなあと空を見上げる。その後描くのを続けられたのだらうか。

○ここは「五月雨」を「さみだれ」と読む。旧暦の五月ごろの降る雨。今年は七夕を過ぎた十日が旧暦の六月一日。大和ことばの「さみだれ」と云はれば風流だが、「五月の雨」ではと。風雅に拘る吉保さんである。

○ヴァイオリンを「提琴」と書く吉保さん。前句同様言葉に拘つてをられる。「ユーモレスク」も「提琴」といふ表記が合ふやうな氣になつてきた。吉保マジック。梅雨時に聴く「ユーモレスク」はしんみり聴ける。「ユーモレスク」をきき遠い昔に引き戻されてしまった。

篠田大佳

こどもの日空には空の果がある
ダービーや意味ありさうな通り雨
曹達水いづれ忘れる話かな

○「空には空の果てがある」は禪的難問である。落語に宇宙の果を話題にした噺がある。八五郎ならそこをずーんと突き抜けたらどうなりますか、と訊いてくる。八五郎の夢を打ち砕いた作者の断定。大人になった夢の無い「こどもの日」である。

○競馬を、競走馬を好きな人の愛し方はハンパではない。この句は馬より馬券に目が行ってゐる。「通り雨」はその間のことを述べてゐるのか。

○ソーダ水も曹達水と書くと又違ふ味がするやうだ。

喫茶店での暇つぶしの会話を聞きながらただ相槌を打ってゐる。曹達水の泡のごとくに忘れてゆく話を聞きながら。

須賀敏子

田植時 鷺ゆるりと飛びにけり
武甲山 写す 棚田に 青蛙
青蛙し みじみと 見て 緑色

○「鷺」の字面が鷹や鷲よりも怖ろしげである。私など鳥のことを知らぬ者には鷺に出会っても鳶かなと思ふくらい。知識のある者に与えられた佳句。ただちょっと残念なのは田植時の時。時は物や物事をピントをずらす作用をする。この句の場合はそれがマイナスになつてゐると思ふ。

○秩父の地に近づくと目に入ってくる武甲山。私の登ったところとはだいぶ山容を変えてゐる。その秩父の名峰を写す棚田。青蛙が句をしつかりとまとめ良い風景句に仕上げてゐる。

○「青蛙おのれもペンキぬりたてか 芥川龍之介」印象鮮明な句。誰でも一度読めば忘れることがない。敏子さんの記憶のどこかにきつと仕舞はれてゐたことだらう。青蛙を眼前にして龍之介の句にひかれてしみじみと蛙を見た結果の緑色である。当たり前のように書かれてゐるが、この緑色は感動をもつて再認識した言葉。凡な句ではない。

田中藤穂

形見なる庭石菖の咲きふゆる
白き蝶三頭もつれ離れずに
ひっそりと葉蔭に咲きぬ鳴子百合

○ニワゼキショウと濁って読む。何の説明も要らぬが、逝きし者への生前と変らぬ花を通しての会話である。庭石菖の花の色はいくつかあるやうだ。余計なことだが私は白より淡い紫いろがこの句に合ふと思ふ。

○なぜ昆虫を頭といふ数詞を使ふのか。横文字の訳から来ておるとか。ここは通常の三匹でよいのでは。一匹二匹の蝶の句は見かけるが三頭の蝶は……と調べたらあった。

森のあひだ三頭の蝶通りやんせ 前川明子

中庭に三頭揉めり秋の蝶 眞田忠雄

藤穂さんも珍しく、おもしろく思ひ一句を得た。三頭とは恋の纏れであらうか。

○目立たぬやうに葉蔭に咲く花。見つけると白い提灯が連らなっている。連らなっているのに騒がしくない。本当にしづかな花だ。

長崎桂子

新緑や涌水溢るる山里
春惜む水平リサイクルへ整理
瓜の銘イエローキングお供へに

○このやうな自然の力が溢るる所で過ごしてみたいと思ふが、反面すぐに飽きるのではと危惧する私がある。この句桂子さん十七音に収めるのに苦労された跡がある。リズムが584といふ変則になった。やはりこれは気になる。さうかといって「涌水溢るる山里」とは云へない。そこで涌水を泉に替へ「新緑や泉溢るる山の里」ではどうだろうか。こうした時の季語は新緑。

○桂子さんには毎度教へてもらっている。今月は「水平リサイクル」。私大分世事に疎くなっているやうだ。「春惜む」が時事句の軽い俳句になりがちなところを抑へてある。生きてきた来し方は「春」なのである。松任谷由美の『春よ来い』で「へ春よ 遠き春よ 瞼閉じればそこに」とある。身辺整理の生活俳句から見事な一句に仕上げている。

○イエローキングをネットで見た。昔、黄色いまくわ瓜を食べたことがある。それがメロンのやうに真ん丸。網目がないさうだ。露地栽培と聞く。マスクメロンのやうにいつも食べれると云ふものではないさうだ。ある意味貴重なメロン。早速お仏壇に。このメロンの名はイエローキングですよと仏壇に語り掛けてあるやうだ。

帽子

赤烏帽子

秋川 泉

父は帽子が好きであった。私も帽子が好きであった。私が嫁ぐ時、母が「亭主の好きな赤烏帽子」と云う言葉を贈ってくれた。夫は、私が帽子をかぶって一緒に外出する時、居心地の悪い感覚でいた。「帽子が嫌いだね」と云われ、私は大切にしていた帽子を全てバザーに出した。「着物を着て」と云われ、内も外も子供が誕生するまで着物で暮した。バイクは危ないからと禁止され、手放した。しかし今、もう父母も旅立ち、私は私の好きを大事にして行く。

麦わら帽子 大日向幸江

帽子、私は多分好きな一品だ。子供時代は、一つの帽子を大事にした。淡いラベンダー色の田舎にしては「ハイカラ」な麦わら帽子、母に手を引かれ小田急線登戸に行く用事があり夏の朝家を出た小田急は気持ち良く走り窓からの風を受けてほんやりとしていた時、強い風が私の帽子を持って行った。私は多分泣いたと想う。

大佐

篠田大佳

中学生と高校生とき、被りなくても良い学帽を被って通学していました。周囲によく理由を聞かれましたが、理屈ではなかったのです。言葉で説明できずに困りました。名前と生活態度と、当時『沈黙の艦隊』という漫画が周囲で流行ったのを契機に「大佐」という渾名を拝命しました。

手編のニット帽

須賀敏子

四十才ころより本格的な登山をするようになった。帽子は安全のため、日焼防止雨よけとして必需品である。ショートヘアになり白髪もちらほら見え出すと、日常的に帽子を被る様になった。手編みのニット帽子を含めると約四十個ほどになる。私のきさやかなコレクションです。

あの帽子

佐藤喜孝

彼女の帽子姿は記憶にない。新婚旅行の時、もしかしたら被っていたかも知れないがこれもさっぱり記憶にない。私と正反対で帽子は好きでなかったやうだ。晩年通院の時には手放さなくなつた。ちょっとした風にもすぐ頭を手をやってゐた。池江さんも被つてゐたが今は水泳帽の下には黒髪かぶさかぶさである。

従妹

田中藤穂

小学一年生の時山梨県の父の生家で一夏を過ごしたことがある。その時母が長いリボンと造花のついた帽子を買ってくれた。その家には私より一つ下のいとこがいて、出かける時私の帽子をかぶってしまつ。おばさんに言われて仕方なくを私に返した。あの時どつして一度でもあの子にあの帽子をかぶらせてあげなかつたのだから。田舎の村ではあんな帽子は買つ處もなかつた。一年生の私にはそういう優しさも才覚もなくて…今はもうその従妹もおばさんもこの世にいない。

夏帽子

長崎桂子

近頃の気候の変化には急で激しさを感じます。それで冬の寒風に、また夏の強烈な陽射から身を守りたいので帽子は必ず外出の折、冬用または夏用を使用して居ります。
今年夏帽子を購入したので少しお店を覗いてみました。多様な材料を使用していて少々違和感を感じました。その日は無駄足でしたがその内に自分に適したのに出会つて日が来るのを楽しみにして居ります

あをキーワード俳句辞典(あ)ー(る)

ベランダ

梅雨明けてベランダを占むキティとプー
命終の蟬ベランダにありにけり
ベランダに見知らぬ木の実二つ三つ
ベランダの切干大根こがね色
ベランダの鴨と目が合ふ昼下がり
どんと花火ベランダの夏盛りなり
ベランダの目白にきざむ冬林檎
ベランダに立てば雲なく月冴ゆる
ヘリコプター
ヘリコプターの影過ぎてゆく茅花の野
春空に在るけもの道ヘリコプター

経る

菊畑経てきし風に香のありし
年経るを瞬時と思ふ年の暮
時を経て修復春の美術館
烏賊舟や永きたそがれ経て灯る
逝く人に刻経て小さき春の雷
冬薔薇時経て晴るる蟠り

減る

進級す減りし机の謎残り
腹減りて蓬を食べば腹騒ぎ
器から器へ菜種油減る

赤座 典子
須賀 敏子
森山のりこ
須賀 敏子
赤座 典子
井上 石動
赤座 典子
須賀 敏子
田中 藤穂
篠田 純子
田中 藤穂
芝宮須磨子
長崎 桂子
定梶じよう
阿部 寒林
木村茂登子
篠田 大佳
篠田 大佳
佐藤 喜孝

櫛の歯のやうに人減る秋の水
椎にある月や身ほとり人減りて
呼捨ての友も減りたる庭石菖
笛鳴やあくがるものとみに減り
万愚節うからやからの減りたるよ
冬ざれて脳細胞も目減りせり
室の花投薬ひとつ減りにけり
野分あとのグリーンカーテン嵩減りぬ
秋の風減りゆくものに消臭剤
投薬の一種減りけり桜二分
賀状書く此度も減りて天仰ぐ
台風来米櫃減りてぬし不覚

ヘルメット

捕虫網ヘルメットの子の振担ぐ 赤座典子
ヘル
ベル押ししてしばらく薔薇の仔細かな
発車ベルホロホールル春隣
聖夜奏ひとつ間の落つハンドベル
短夜や壁の向かうにベル止まず
秋深し老人会のメロディベル

ペルー

粗衣のまま行ききたしペルー春ぎざす
葉ざくらやペルーへ向ふ粗衣のまま

田中 藤穂
田中 藤穂
鈴木多枝子
渡邊 友七
竹内 弘子
芝 尚子
芝 尚子
篠田 純子
中川句寿夫
赤座 典子
長崎 桂子
田中 藤穂
田中 藤穂
佐藤 喜孝
木村茂登子
篠田 純子
森 なほ子
長崎 桂子
須賀 敏子
須賀 敏子

あとがき

暑中見舞

ただ暑いだけなら対処の仕方を経験で越えられるが、コロナといふ重苦しい暈が被さってゐてなんともやりきれない。会員諸兄姉も無理せず自堕落を恥と思はず過ごしませう。

断捨離

いま、私は断捨離計画中です。そのひとつに俳号を改名した。意味はあまりない。気分一新ぐらい。細かいことを書いてあるとあをの発行に一層の遅れが生じるので改めて書くことにする。

短文のお題「表札」

江戸時代には表札はなかったさうだ。長屋の入口には表札めいたものが並べて打ち付けられてゐるのを見かけるが。

表札の素材はさまざま。私の表札は木製である。ただ毛筆で書いてあるのではなく名前が浮き彫りになってゐる。時がたち過ぎたので見にくくはなつてゐるが

役目は果たしてゐる。俳句の手ほどきをしてくださった武井石舛画伯の彫になるものである。俳句のほかには山歩き、酒の楽しみなどをしへていただいた。いまの生活の大半のエネルギーはこの時注入されたものと再確認。振り返るとこの表札とあるいてきたやうなものだ。

先にも書いたが家も断捨離の対象。何度も引越してきた私に蹤いてきた表札。次はどんなところに懸けるのだらう。

(喜孝)

二〇二一年七月号

発行日

七月三十一日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090 9828 4244

ファックス

03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)